

平成25年 2月 定例会

◆(淵上陽一君) 次に、**あか牛の振興について**お尋ねいたします。

平成 20 年、私は、あか牛振興について要望を行いました。これは、当時、黒牛の肥育頭数6万 4,000 頭に対して、あか牛は2万 2,000 頭と3割を切る数にまで落ち込んでいたことに対する危機感からでありました。

熊本県は全国一のあか牛生産地といいながら、黒牛との差は広がるばかりで、現在でも、黒牛は8万 3,000 頭にふえた一方、あか牛は1万 7,000 頭と減り続けています。加えて、あか牛の繁殖雌牛は、昭和 40 年の4万頭台をピークに減少が続き、現在では約 7,000 頭余りまで減っております。

平成 20 年当時、あか牛は、黒牛に比べ、1頭 20 万円も安い価格でしか売れない評価の低さと県内外での販売が低迷していることにより、肥育素牛、すなわち子牛の市場評価が低くなり、繁殖農家が市場価格の高い黒牛生産にシフトをしたという背景があったことから、その打開策として、あか牛のブランド化が急がれました。

そして、現在は、県産牛肉消費拡大推進協議会の設置や、くまもとあか牛の統一名での消費拡大、大消費地における販売・普及宣伝活動に加え、全日本あか毛和牛協会によるあか牛独自の評価基準づくりなどの相乗効果によって、あか牛に対する評価が上がり、需要がふえてきていることはまことに喜ばしい限りであります。

しかし、その一方で、あか牛の肥育農家からは、新たな問題点を指摘する声が上がっております。昨年山鹿市で行われたあか牛振興大会の冒頭、組合長から、現在、あか牛の子牛の価格が下がらないことにより、肥育農家は大変厳しい状況だ、また、血統の偏りが出てきているので、これらの課題を早急に解決しなければならないとの問題提起がありました。

子牛価格の高騰は、供給が需要に追いつかなくなっているため、市場のバランスがとれないことが原因であります。血統の偏りについては、一般に、ある集団の近親交配の程度をあらわす近交係数が過度に上昇すると、能力的弊害、具体的には、枝肉重量やロース芯面積の低下等が生じると言われておりますが、現在、褐毛繁殖雌牛の 65%は山鹿市菊鹿町で生産された種牛・光武の系統であるとともに、褐毛和種凍結精液の配布実績も光武系統で 80%を占めていることから、早急な対策が求められています。

このような状況から、今後のあか牛振興には、繁殖雌牛をふやすことと血統的な偏りを抑制することの2つの対策が必要と考えられますが、県としてはどのように取り組んでいかれるのか、農林水産部長にお尋ねいたします。

〔農林水産部長福島淳君登壇〕

◎農林水産部長(福島淳君) 肥育農家の希望に対応した子牛を供給するためには、母牛となる繁殖用の雌牛をふやすことが最も有効な手段だと考えています。そこで、県では、繁殖農家が母牛をふやす意欲を高めるために、繁殖雌牛の購入費用の一部を助成する家畜導入事業に取り組んできました。さらに、平成 23 年度からは、新たに阿蘇あか牛草原再生事業をスタ

ートさせ、放牧を利用した繁殖雌牛をふやすことにも取り組んでいます。その結果、現在は、あか牛の飼育頭数の減少に歯どめがかかり、増加傾向にあります。

これらの事業をさらに着実に進めることで、肥育農家の求めに応じた子牛が供給されるよう、関係団体などとともに努力してまいります。

次に、血統の偏りは、人気のある特定系統の種雄牛が多く交配され、その子孫の割合がふえてきたことで生じています。

県では、農家の選択肢が広がるよう、さまざまな血統の種雄牛を育成しております。農家がこれらの中から種雄牛を選択することで、血統の偏りを抑制できると考えます。今後も、農家に対して、個々の種雄牛の特徴や能力などとあわせて、血統が偏らない望ましい交配に関する情報を提供するなどの助言、指導を行ってまいります。

〔淵上陽一君登壇〕

◆（淵上陽一君） 畜産農家の人たちは、多分導入資金が一番喜んでおられるんだろうというふうに思っておりまして、その延長ができればというふうに思っております。

今般、アメリカ産の牛肉に対する輸入規制の緩和によりまして、日本向けに適合するアメリカ産牛肉の供給可能量は、これまでの4倍になると言われております。当然、日本国内の牛肉価格に相当な影響が出てくるんであろうというふうに思っております。せっかくあか牛が新たなブランド牛として認知、評価を得た今、これからも末永く市場で選ばれる、また生き残っていくブランド牛の地位を確立するためにも、どうか、これまで以上にまた効果的な対策をとっていただきますよう、よろしく願いをいたします。